



君の世界に芽生えるものは

くおんじゅく
久遠塾
vol.38



久遠塾 塾長



みなぞえ いじ 皆添 英二

久遠塾 ☎ 080-2182-1379 13:00~21:00
メールアドレス shiranuka.kuon@gmail.com

北海道白糠高等学校運営協議会 (コミュニティ・スクール)が 設置されます！

今年の9月1日、白糠高校に「学校運営協議会」が設置され、「コミュニティ・スクール」が導入となります。コミュニティ・スクールとは「学校運営協議会」を設置している学校のことです。

生徒たちは「ごみの量は1000トンくらいかな」「経費は1億円もかからないのでは」などと答えていましたが、令和2年度に排出したごみの量は約2500トンで、その処理にかかる経費は約2億円となっています。

生徒たちに覚えておいてほしいことは、ごみはきちんと分別するということです。「資源」として出しているつもり「紙」も分別ルールを守らないで紙類を混ぜてしまえば全く意味はありません。生徒には『分ければ資源、混ぜればごみ』ということを強調して話しました。授業の最後には、生徒たちがグループに分かれて自分たちができることを話し合いました。内容は「ごみの量を減らすには?」「ごみ処理の経費削減するには?」についてです。ここでは「ポイ捨てをしない」「生ごみは水切りをして乾燥させる」などといった意見がでました。

②巡検・調査(6月21日)

6月21日、塾スタッフ全員が、馬主来沼巡検および和天別川河口付近の海岸漂着ごみ拾いに同行し、拾ったごみの調査に参加しました。

学校運営協議会とは、簡単にいうと保護者・地域の声を学校運営に生かして『地域と共にある白糠高校』づくりの核となる組織のことです。このことに先立ち、白糠高校では、今年の4月から町内各関係団体等へ『白糠高校魅力化地域協働応援団(※コンソーシアム)』の設立を依頼しました。

※コンソーシアムII魅力ある高校づくりを目的とした応援団・チーム白糠高校生専属サポートチームの久遠塾スタッフもそのメンバーとして早速登録しました。

さて、白糠高校の「コミュニティ・スクール」の特徴は、生徒との関わりにあります。通常のコミュニティ・スクールにプラスして、生徒の活動支援、とりわけ、白糠高校魅力化『鮮麗コンソーシアム』として、探究活動およびキャリア教育に積極的に参入していくことにあります。

コミュニティ・スクールができることにより、今まで以上に「町民の皆さんの声が反映される白糠高校」「町民の皆さんが教育活動に参画できる白糠高校」「町民の皆さんと生徒たちを育てる白糠高校」すなわち、『地域と共にある白糠高校』づくりにつながるのです。

まず、馬主来沼とその周辺の海岸の巡検を行い、塾スタッフの柴澤と中川が17日の事前指導を踏まえて、「河口が荒波にせき止められて満水になると、自然に太平洋に流れ出る珍しい沼ですが、その波が津波となった痕跡が海食崖に残っています」と説明を加えました。

その後は、和天別川河口付近の海岸に移動し、漂着したペットボトルや空き缶などの小さなごみからタイヤなどの大きなごみまで、自然物以外のものを約1時間半にわたって拾い集めました。集めたごみは、学校にトラックで持ち帰り、種類別に分けてその量を調査しました。

次は、参加した生徒の感想です。巡検では、海食崖や斜交葉理を観察して自然のすごさを目の当たりにしました。ごみ収集では、漁具の漂着物が多いと感じました。

工藤優希さん

私は白糠町生まれですが、巡検によつて改めてパシクル周辺をじっくり観察する機会を得ました。ごみ収集では、ペットボトルの多さに、ポイ捨てについて考えさせられました。

河原七海さん

また、生徒自ら地域が抱えている諸課題の解決への模索や、地域を学びの場とした地域課題解決型キャリア教育等の実践を通して、白糠町に限らず、全道・全国の地域を支える人材を育成することにもつながってゆくこととなるのです。

1学年の「総合的な探究の時間」に久遠塾も積極的に関わりました！

①事前指導(6月17日)

6月17日は事前指導として、町内の地名の由来や町のごみ問題などを取り挙げて、スタッフそれぞれが生徒に講義しました。まずは、スタッフの柴澤大夢が「馬主来沼」の「パシクル」という地名の由来について次のように説明しました。

「パシクル」は元々、アイヌ語で「カラス」を意味しています。また、アイヌ語の分析と伝説をもとに、その原型は「パ(見つける)・シリ(陸地)・クル(影)」で、その言葉が重なって「パシクル」となりました。

次に、中川雄貴が馬主来自然公園内にある、クジラを模した石像に書かれた「フンペリムセ発祥地」について次のように説明しました。



馬主来沼周辺の巡検の様子。海食崖を観察する生徒たち。

生徒は、事前指導によつて問題意識を持ち、実際に巡検やごみ収集・調査をすることによつて、課題解決方法を模索するきっかけを得たと思

います。また、地域の歴史・文化について知る機会を得たことにより、今後の学習意欲につながることを期待しています。



1 和天別川河口付近の海岸で漂着ごみを拾い集める生徒たち。環境問題について理解を深めました。2 約1時間で集めたごみの山。今年は約220kgのごみを収集しました。3 収集したごみはトラックで学校に持ち帰り、一つ一つ分類して、記録用紙に種類別に数を数えて記録しました。特に多かったのは金属類のごみで、全部で63個ありました。2番目に多かったのはガラス・陶磁器類で、11個という結果になりました。

